

れた。私の妻子は官舎のお隣的一条さん（ご主人は騎兵隊）と力を合わせ、威興―元山へと歩き、元山のお寺に落ち着き、三八度線の川（漣川）を渡るのに舟が必要なので、日本へ帰ってからお返しする約束で、お寺からお金を借りて五、六人で舟を雇い三八度線の川を渡ることができた。そして川岸にて米軍に迎えられて京城（ソウル）へ移動し、さらに京城より釜山へ、そして昭和二十一年五月に箱崎港に上陸して無事帰国ができた。

シベリア抑留二十話

福井県 片山清次

第一話 タイシエットーブラーツクの地理

この地は、シベリアの中央あたりに位置し、北緯五六度の緯度の範囲に入る。この緯度を右に辿って行くとかムチャツカ半島の中央を横断している。

夏季は、昼間が長く午前零時頃まで戸外は薄明るい

反面、午前四時には夜が明けている。メーデー近くになると、原生林の松の下に残っている雪が急激に溶け始め、小さな流れとなって凍った大地がぬかるんで来る。激しく長い冬を耐え抜いた迎春花が松の木の下の顔を出す。と見る間に可憐な花が咲く、この力強い開花をきっかけとして原生林に春が訪れる。ロシア人は、ポドスネージニクと呼び春の訪れの目安としている。日本では「まつゆきそう」と呼んでいる。

そして、あたりは明るい緑に装われ一足飛びに夏を迎える。その頃になると虫類が活発に活動を始める。

日本の蚊と種類が違うのか、水たまりに棲息するボウフラは、マツチの軸ほどの太さで約一・五cmの体長に剛毛が生えている。水底から水面に忙しそうに浮かんでは沈んで行く。最初は小魚ではないか？ と見間違った程であった。その蚊の大群に襲われる。シベリアは冬が寒いから夏はさぞかし涼しいだろうと思われるが、日本の夏と同じように暑い、大陸性で湿度が低く日陰に入ると涼ぎよい。蚊の大群より恐ろしいのはムシカである。日本では蚋ハナハチと呼ばれているゴ

マ粒程度の吸血昆虫である。それが夏に入ると一斉に発生する。誇張のように思われるが、一体どこから発生するのか、夏空を仰ぐと太陽がぼんやりと見えるほど空一面、真っ黒になって飛び交う。顔や手足など露出部分に食らいつき血液を吸うのである。吸われた部分は忽ち腫れ上がり殴られたように顔が變形する。体質によっては発熱して倒れる者も少なからずおり、ソ連側はその対策として、枕袋に寒冷紗かんれいしやを目の部分に縫い付けた袋を頭から被るよう各人に配布して野外作業に駆り立てた。ともに酷使されている馬は、目の回りや鼻に、唇等の軟らかい皮膚に無数にたかり吸血するので鮮血をタラタラと流し、血塗られた顔はかわいそうであった。

しかし、夏は野草や木の実、キノコ等の野山の幸に恵まれ、常に空腹にさいなまれる捕虜にとっては嬉しい季節であった。朝食後に配給される昼食は、作業出発までに腹の中に詰め、空の飯盒をぶらさげて作業に出る。昼休みともなれば森の中に入る。五分間もあれば色とりどりのキノコが両手で抱え切れぬ程採れる。

直ちに飯盒に入れ焚き火で煮て昼食とし空腹を満たした。赤や黄色に毒々しく彩られたキノコも有害ではなく結構おいしかった。また森の地表には、日本ではコケモモと呼んでいるヤーガドがびっしりと地表を覆うほど稔るのである。小指の頭大の赤紫の実で、色、形、味の全てが林檎とそっくりであり、たくさん食べると歯が浮くのである。

植生として、当地は赤松、から松、えぞ松、樅等の針葉樹はシラカバで占められ、いわゆるタイガと言われる原生林を形づくっていた。和歌山県で林業を営んでいる親友の笠松文夫氏が伐採作業の折々に最も太い樹木の年輪を調査したところ、二百八十年―三百年の歳を刻んでいたという。

湿地にはチエレムシヤと称するニンニクと同様の強烈な臭気を持つ植物が生えており、北海道の人の話ではアイヌネギとか行者ニンニクと呼んでいる。また木イチゴ、スグリやコゴミ等も生えており、食欲とビタミン補給の上で効果があった。

ブラーツク近辺では原生林の外れに時折りステップ

がひらけ、そこは樹木は殆ど見受けられず数十年間にわたり繰り返して来た地衣類が積み重なり、まるで褐色のカステラを敷き詰めた感じである。一步、足を踏み入れると巨大なスポンジの上を歩くように、ふわふわとして足がスプリングのように弾み、歩くのに苦勞する。そして、そこには専門語でいうクッションプラントという直系五〇cm、一m程の丸い大きな海綿状の植物が点々と生えており、見慣れた原生林とは一味も二味も違つた自然の妙に何とも言えぬ感動を覚えた。

森と言へば、川のことにも触れたい。あの世界一の湖といわれるバイカル湖から唯一本流れ出るアンガラ河は、チュナ河、ウダ河、ビリユサ河等の多くの枝河を経てシベリア三大巨河の一つであるエニセイ河となつて、延々四千kmもの流れとなり北極海に注がれる。冬季は二m以上結氷する。

八月も終わりともしなれば、シラカバは一夜にして黄色くなり落葉する。秋は一瞬にして通り過ぎ、薄ら陽の照る合間に、冬の予告として霰が時折パラパラと頬

を打つ。緑の小草は褐色に枯れ果て、猛威をふるつた蚊や蚋の群れは、いつの間にか姿を消している。九月の半ばともなれば、空は連日陰鬱な鉛色に彩られ冬の訪れを告げるのであつた。朝夕の気温も低下し、夏の木綿シャツからフハイクと称する綿入れの防寒衣袴が支給される。このころ霰は雪あられに変わり、あたりは白色の銀世界となる。程なくフェルト製のワレンキーという防寒長靴も支給され、ここに長くて寒い本格的な冬を迎えるのであつた。雪は一冬で四〇―五〇cm程度と積雪量は少ないが、小麦粉のように軽く、風に乗り吹雪となる。

地表三m程は岩石のごとく固く凍結し、ツルハシ等には全然受け付けない。湿地帯は万年凍土で、夏でも氷がザクザクと掘り出されてくる。冬季の平均気温はマイナス四〇度前後であり、査定気温マイナス六八度というロシア人でも味わつたことのない貴重な体験をした。この極寒の晴天の日は、微細な水蒸気の結晶が大気中を漂い陽光を透過してキラキラと輝く夢幻の世界を描き出す。この現象はダイヤモンドダストと呼ばれ

ている。昭和五十(一九七五)年完成したブラーック水力発電所(出力四五〇万KW)がアンガラ河を堰止め琵琶湖の八倍にも達する巨大な貯水湖を造成した結果、現在では平均気温が五度上昇したと言われている。

ちなみに当時、この地区は囚人の墓場とも言われ、『収容所群島』や『イワンデニーソビッチの一日』等の著作で知られるソルジェニーツィン氏や瀬島龍三氏等も、その著書でバム地区での過酷な抑留生活を述べられている。

バム地区強制収容所に二十五年間囚人として服役された石原吉郎氏の記録によれば、数あるソ連の強制収容所の中で最悪の環境に属する三つの中の一つが「バム地区」の収容所や監獄である。他の二つは「マガダンを中心とするコルイマ地区」と「北極海に面したグオルクタ地区」である。ここへ送り込まれた囚人は、概ねその刑期の満了を待たずして自然に淘汰されることとが囚人間で知れ渡っている。この三つの地区のどれかに受刑を命ぜられるとさすがの凶悪犯もガクッと肩

を落としてしまうという。

平成の現在では、これらの忌まわしい建物の殆どは取り壊され跡形もない。人跡もまれな鬱蒼たる原生林は広く開発され、タイシエットを起点とするバム鉄道が、遠く樺太の対岸ニコラエフスクまで四千kmの第二シベリア鉄道として完成し、その沿線には新しい都市が建設されつつある。その基礎を作ったのは、この地に抑留された関東軍の将兵四万人の命と血の代償であることを絶対に忘れてはならない。

ロシアでは、バム鉄道は総てロシア人の手で建設された世紀の大事業であると教科書で教えているという。タイシエット方面に慰霊旅行に行く度に、この鉄道を建設したのは日本人抑留者とロシア人の囚人であることを言うと、彼らは一様に驚きと労りの表情を示すのであった。

第二話 タバコ

タバコ愛好者にとって、タバコは日常生活上、欠くことのできない嗜好品である。まして、何かと自由を

束縛されている捕虜の身にとつては非常に大きなウエイトを持っている。軍隊時代でも、タバコの配給が次第に遠くなるに従つて一本のタバコの価値が上昇してくる。日ごろは下級の初年兵に対して威張り散らしている古兵が、妙に打ち解けた笑顔で接近して来るのが時々あった。当初はその意図が分からず戸惑ったが、すぐに相手の意図することが理解できた。

あり触れた話のあとに「ところでお主、タバコを持っていないか？ もし持っていたら一本もらえないかねえ」と、もうその時には横柄な古兵の顔は消え、そこには卑屈な男の顔があった。捕虜ともなれば、環境が環境だけにニコチン中毒者が示すタバコに対する執着は、命の綱である三五〇gの黒パンを犠牲にしても一服のタバコと交換しようとする。

ところで、ロシア人が吸うタバコは日本と同様に巻きタバコ、口付きタバコ等があるが、殆どのロシア人はマホールカと呼ぶ荒い粉状のタバコを吸う。日本はもちろん、満州でもお目にかかったことがない初めての珍しいタバコであった。ちなみにロシア語辞典によ

ると下等な刻みタバコとあり、日本百科全書では、ニコチアナ・ルスチカ種に属する品種とある。ニコチンの多い暗色タバコで、ポーランド、ハンガリーではパイプタバコに用いているところもあると書いてあるが、彼らは新聞紙を小さく切った上にマホールカを載せ、片手で器用に棒状に巻き上げ自分の唾液を糊の代わりに湿らせて硬く巻いてシガレットと同様に吸う。

初めて吸ったときは、あまりにも刺激が強すぎて喉が詰まり目を白黒させて吸ったのだが、慣れてしまふとその強烈な刺激が病み付きとなる。またタバコを吸うと慢性的空腹感にさいなまれてゐる者にとつて一時的に空腹感が満たされるので、抑留中にタバコの味を覚えた者が少なからずいた。

ニコチン中毒者は禁断状態になると恥も外聞もなくなつてしまふ。ロシア人監督が捨てた吸い殻を先を争つて拾い、唾液でベトベトになつた吸い殻を何の躊躇もなく嬉々としてくわえ、唇がやけど寸前まで貪り吸うのであつた。

タバコを吸っていると、いつの間にか見知らぬ兵隊

が近づいて来る。そしておもねるような日付きで私の口元に注目している。ハハーンこの兵隊はタバコに飢えているのだなと分かっているが、少し意地悪く無視して吸うていると、切羽詰まってその兵隊は真剣な顔付きで走り寄り「済みません。捨てる前に一服だけ吸わせて下さい」と恥も外聞もなく絶叫調で哀願される場面にしばしば出会った。

歴史に強いインテリの兵隊が考えついたのであろうか「余香を拝す」という言葉が流行した。これは平安初期の学者、菅原道真が宇多天皇、醍醐天皇に認められ異例の出世を遂げたが、藤原氏や一部の貴族の讒言ざんげんによって遠く九州太宰府に左遷された。道真は太宰府にあって「去年、都の清涼殿で天皇から褒美に衣服を下賜された。道真は毎日、御賜の衣服を取り出し、余香を拜し天皇の御徳に感謝の日々を送っている」との史実から思いついた言葉であろう。作業の合間にタバコを吸っている者に対して親しい仲間が「同志○○、余香を拝させてもらえませんか？」というふうに使われたが、ユーモアがあり好評であった。

墓参のため、ウラジオストック、ハバロフスク、イルクーツク、タシケント等の都市を訪れた時、マホルカを買いたくて調べたが、現在は生産されていないのか、どこの店にも見当たらなかった。またロシア人がガイドにマホルカのことを尋ねたらなぜか険しい顔をして、そんな言葉をどこで知ったのかと詰問調での返事が返ってくるのであった。MAXOPKAと印刷された薄茶色の小袋に入ったマホルカは、捕虜生活の中の思い出に大きく残るものの一つである。

第三話 シラカバ

松や樅もみのような針葉樹の茶色の肌比べて、独特の雪のように白い木の肌は、それだけでも清楚で美しく、また冷厳な印象を受ける。ロシア特にシベリアの地を代表する樹木であろう。

抑留生活の実用面でも何かと役立ったことが思い出される。抑留当初は夜間、電灯の代用として樹皮を燃やし照明に役立てた（煙が出るのが難点ではあったが）。愛煙家は紙不足の対策としてマドロスパイプ風

のパイプを、豊富にあるシラカバの幹と枝を選び作業用の鋸と斧で粗造りしたものを拾ったガラスの破片で丹念に削り、焚火の煙で焦げ目を付けて更に襪褌ぼつち布で仕上げ、市販のものと同色のない程の優れたパイプをつくりあげる職人肌の兵隊もいた。マールカ不足の対策として、シラカバの葉を乾燥し鋸屑を混ぜてマールカ紛いの物をつくり吸ってみたが、煙ばかりでタバコの味は皆無で大失敗であった。

さて、雪解けの春を迎えると森のシラカバは一斉に米粒大の緑の若芽が目立ち始め、男性を思わせる青臭いフェロモンが漂う。この時期にはシラカバの幹に斧で縦に軽く切り目を入れ、その切り目の終わりに導管として小枝を差し込みシラカバの樹液を採るのである。ちょうどゴムの樹から生ゴムの樹液を採る要領である。飯盒を受けに置くと一、二時間で透明な水が半分程溜まる。無味、無臭であるが、強いていえば微かに甘味が感ぜられる。作業中の飲料として重宝したが、これは春の萌芽時しか採水できないのが残念だった。現在でもロシア各都市の食料品の戸棚には二リッ

トル瓶に詰めたシラカバの水が商品として売買され、ロシア人に飲用されている。

夏のシベリアは、想像に反して暑い。だが日陰に入ると暑さが凌げる。緑豊かに茂るシラカバの木陰は強烈な陽光を遮り、体力の消耗を防いでくれる。

紙不足は、日常の生活の上になにかと不便をもたらす。そこでシラカバの板をピンボンのラケット状に切り、ノート代わりに活用し、紙不足を補うものとして広く利用された。作業人員の算出、割当、伝達事項の記入等々、板面に記入し、消しゴムの代わりにガラスの破片で削り取り再生を繰り返したものである。松は樹脂が出るので不適合だが、シラカバは樹脂がなくて板面も白く、適度の硬度もあり大変役に立った。

ロシア人が川魚を獲るのを見た。日本と同様に川幅いっぱい網を張るが、その網の浮きには一〇cm幅にシラカバの樹皮を剝いたものが巻き付けてあった。

短い夏が終わると同時に、シラカバは一夜のうちに葉は黄色くなり脱落していく。

ある日、監督に連れられて森の奥にシラカバを伐採

に行つた。人跡未踏ともいえる場所であるが、そこにはシラカバの若木が整然と生えている。その隣には、一回り大きい若木が前後左右に一定の間隔で生育している。更にその隣には直径十cm程のシラカバが前後左右に一メートル間隔で整然として茂っているのに出会つた。この情景を見ると、あたかも造林技術者の手によつて人工的に植栽されたかのような錯覚を覚えるものであつたが、子細に観察してみると、自然のなせる業であることが理解できた。一本一本の木が育つような面積、日照、通風等が配慮され、その蔽しい環境を克服できない木は自然淘汰されていくのである。人間社会の生存競争以上の蔽しい戦いがこの蔽しいシベリアの原生林の中で営まれていることを発見して、強い感動を覚えた。このシラカバの群生している奥に實際大きい一本のシラカバを見つけた。数百本の若木を慈母のように穏やかに見守っているこの巨木に、私は思わず手を合わせた。

秋とは名のみ、長く暗い冬が急ぎ足でやつて来る。

森の針葉樹は、緑の葉の上に白く雪化粧をしている。

シラカバが、白い肌に黒い突起を点々と散らばらせ、そして細い枝が粗い箒のように空に向かって突っ立ち寒風に身を震わせている様は、何とも物悲しい風景であつた。監督の中尉が油をたっぷり蓄えたシラカバの木皮を集めるよう指示した。それをドラム缶に詰め乾溜すると油が採れる。その油はターチカ（一輪車）の車軸に塗るのに使つた。日本人には浮かばない知恵だと感心した。

ロシアの農民は、シラカバの木皮を巧みに加工して小物入れ、食物の貯蔵容器等を作る。また木質部は人形、食器、置物、家具類の製造原料として彼らの日常生活のあらゆる面に浸透している。

シラカバは、寒冷地で生活するものに神が与えられた素晴らしい木であると思う。

第四話 バイカル湖

沿海州グロデコフ駅の引込線に待機する貨物列車にトウキョウ・ダモイの言葉を真面目に受けて乗り込み、西へ西へと家畜同様に扱われ不自由な旅を続ける

こと二週間、列車は薄ら日の当たる波打ち際に一時間ほど停車した。満々たる水を湛え、海のような大波が打ち寄せている。手の切れるような水は淡水であった。「ここはバイカル湖だ」誰かが感動的な大声で叫んだ。地理の時間に習った世界一の湖程度の知識がよみがえる。故郷を離れて五千kmのこの地に立っている自分の運命を改めて見直した。

バイカルとはタタール語で「豊かな湖」のことであると物の本に記されているが、語源の表すとおり一五〇〇種以上の動物が生息しており、バイカルチョウザメ、バイカルオームリや淡水あざらし等、バイカル独特の生物がいることで有名である。

岸辺にバイカル湖沼学研究所があり、バイカル湖の生態について興味深い物品が多数展示されている。近くのリストビヤンカ村にホテル、バイカルが建つており、このレストランでは、オームリの魚料理や野生の葱などが昼食に出され、口を染ませてくれる。このリストビヤンカの湖畔に古びた保育所がある。この保育所は、一九四五年から数年間にわたり日本人捕虜

収容所として関東軍の将兵が収容されていた。付近にある造船所や森林伐採作業に従事させられていたのがある。五百m程の森の中に日本人死没者の墓がある。

この墓にはロシア人ボランティア団体の手により七八人の死没者が手厚く葬られていることを、大部分の日本人観光客は知らぬままに、嬉々として観光を終えて帰ってしまうことは誠に残念なことである。

次に、バイカル湖に関連のある数字を挙げてご参考までに供したい。

湖の長さ六三六km、最大幅八一km、最小幅二七km、湖岸の長さ約二千km、最大深度一六二〇m、平均深度七三一m、面積三一五〇〇平方km、水の容量二三〇〇〇立方km、海拔四四五m、透明度四〇m、島の数三〇、流出河川一、流入河川三三六、棲息動物一三四〇種、植生植物五五六種。

参考……琵琶湖の面積 六七二・四平方km（バイカル湖はこの四七倍弱）

関連数値は『秘境バイカルのんびり旅行』伊藤俊

郎著 国際文化出版社 より抜粋

第五話 寒さとアルコールには驚くほど強いロシ

ア人

前述の貨物列車でシベリア奥地へ強制輸送される途中のこと、九月も半ばを過ぎ、列車はハバロフスクからさらに西北の方向へ進んで行く。日中でも小雪が貨車の隙間から吹き込んでくる。朝夕の気温はめっきりと低下してきたことが、貨車の隅に開けた小使用の穴が凍り始めたことから分かる。五〇トン貨車にすし詰めになされている百余人のいきれと、炊事に焚く一台のダルマストーブの熱気で車内は寒いながらも何とか凌げた。

夜明けに列車が山中の引込線で停車した。「ガチャーン」と施錠が乱暴に外され重い扉が開かれる。さつと舞い込む朝の冷気に思わず体が引き締まる。「ダワイ・ブイストラー」自動小銃を腰のためにして大声でどなる若い警護兵の分厚い軍用外套の上には、白く粉を振りかけたように氷がへばりついている。顔は熟した果物のように赤く、眉毛や不精髭はサンタクローズの絵のように白く氷がついている。貨車と貨車

の連結部に松の厚板を無造作に打ち付けた監視台に彼らは、何の遮蔽物しやへいぶつもないまま、軍用外套一枚だけで進ずる列車に夜も昼も立ち続けているのであった。

零下数十度の外気の中を機関車から吐き出される煤煙にまみれての日々は、想像しただけでも大変な軍務である。あの満州の寒さで鍛えた関東軍将兵といえども、この寒さを克服するだけの体力の持ち主は残念ながらいなと思う。

別項で書いたが、零下数十度の夜の雪原で貨物列車の到着を待機中の出来事であった。我々は燃えさかる焚火のそばで、回転焼きと称し自分の掌と背中を交互に暖めて暖を採っていた。一緒にいた警備係のハルマート・セルゲー軍曹は、羊革のシューバーの襟を立てて足元の雪の上に背中を丸めて寝転がった。と見る間にグウグウと高射たかげきをかいいて寝込んでしまった。そこに観たものは野獣のごとき精悍さであった。これではナポレオンもヒットラーの精鋭も齒が立たなかったのも当然であろう。

收容所の四隅に望楼が建っており、終日、警護兵が

一〇mの望楼に昇り勤務している。マイナス四〇度にもなる高い望楼上の勤務は過酷である。吹雪の夜などは体感温度はマイナス五〇―六〇度にもなる。狭い望楼の中では歩くこともできず、ひたすら寒気の中で自動小銃を構えての立哨勤務は、軍隊生活を経験した者には十分に理解できる激務である。ある日の朝早く望楼の下を通ったら、若い哨兵が水で真っ白な眉毛と寒気で真っ赤になった顔をして望楼から降りて来た。そして通常の羊毛シューパーの上に更に一回り大きいシューパーを着込み、裾を引きずりながら歩いて来た。これほどの寒気に耐えるため、神はロシア人をアルコールに強い体質の持ち主に作り賜うたのであろうか？ アルコールに滅法強い人種でもある。

満州での戦利品であろう、日本の金鶴香水を顔見知りのサーシャ軍曹が十本ほどマガジン（国営売店）で買って来た。コップを貸してくれと言う。彼は、その中に香水の栓をとり全部入れてしまった。そしてニンニクを取り出し、ナイフで細かく刻んだものを百cc程の香水の中に手早く混ぜて飲んでしまった。彼は

ウォッカの代わりだと言う。なるほど、香水はアルコールに花の香りを溶かしたものはあるが、日本人では到底考えられないことである。

先年、ブラーツク水力発電所の貯水湖底に眠る日本人戦没者の慰霊祭を湖上の巡視船上で行った折り、ブラーツク市長をはじめロシア人幹部はコップになみなみと注いだウォッカをまるで水を飲むように何度も飲み干しビクともしない場景に出会った。我々一行とは桁違いの強さを見せつけられた。

このようにアルコールに強いロシア人の体質は、種を明かせばアセトアルデヒド脱水素酵素が多い人種であり、寒冷地帯での生活はアルコールに強い体質を更に助長し今日に至ったと見るべきであらう。

第六話 トーニヤの耳

寒さに強いロシア人に関連して表題のことを書いてみよう。

第五病院の責任将校のスハチェンコフ大尉は、夏冬を通して天井の大きく丸い軍帽を冠っていた。あの敵

冬の中でも毛皮の防寒帽を冠ったことは一度もない。

関東軍時代、冬季の満州での軍隊生活では、防寒帽の垂れを下ろし耳を保護するのが日常であった。帽垂れを上げて着帽している姿は確かに格好よく見えるが、強い寒気の下に日本人の耳を外気にさらすと忽ち赤く霜焼けになってしまう。威厳を保つため帽垂を上げて格好をつけている将校や下士官の中には耳が赤く腫れ上がっている者がしばしば見受けられた。まして満州より更に寒いシベリアでは、耳を外気にさらすことは日本人にとって苦痛でもあった。だが、耐寒力に優れたロシア人は平気で歩いている者が多い。スハチェンコフ大尉は、紅熟したトマトのように赤く色づいた耳を剥き出しにして病院の内外を毎日忙しく飛び回っている。

洗濯場の責任者でもあるトーニヤも防寒帽を冠ったことがない。厳寒のある日、彼女は耳を真っ赤にして部屋に入ってきた。「トーニヤ、そんな赤い耳をして何ともないのかしら？　日本人は痛くて辛抱できない」と言ったら彼女は「私の耳を触ってごらん」と言

う。彼女の形のよい耳に触れてみた。驚いたことに彼女の耳はプラスチックでできたように硬く感ぜられた。ちょうど指を握った同じ感覚であった。軟らかい日本人の耳からは想像することもできない硬さ、これはロシア人の体質と長い年月、寒冷の地での生活等に順応した結果であろう。

第七話 カテゴリー検査（等級検査）

ラーゲリでは二、三か月ごとにカテゴリー検査と称する検査が実施される。これは疾病の発見より労働の適格性を目的として行われる。ラーゲリに居住する者全員を漏れなく対象とし、全員が素っ裸で一列縦隊に整列する。陰毛を剃り落としたペニスを丸出しで順番を待つ、主として二十代のうら若いソ連の女軍医が日本人軍医を立ち合わせ検査をする。まず一人ずつ女軍医の前に立つ。

頭の上から足の先まで一瞥、下手くそな日本語で「マレーミギー」と命令する。回れ右をすると臀部の筋肉を指先で軽く摘まみ傍らの助手に「ペーレイ・カ

テゴリー」等と判定を下す。その間わずか数秒間。時たま木製の玩具のラップのような聴診器を耳に当てることもあるが、ほとんどは尻摘まみであった。

これは、医学的に言うところ皮下脂肪厚による栄養状態の判定手法の一つである。しかし未婚の若い女軍医が表情ひとつ変えることなく無機的に処理していく態度は、我々を人間と見ず、まるで家畜を扱おうような心理状態であるとの印象を毎回感じさせられ屈辱の時間であった。

我々はこの検査を奴隷検査と呼んでいた。簡潔に表現された言葉である。判定結果に従い昇格または降格した者は翌日から作業部署が変更される。だが実際には第一級と第二級には何らの差はつけられなかった。

一 ベールイ・カテゴリー（第一級）|| 肉体頑健にて、あらゆる作業に適する者

二 フタロイ・カテゴリー（第二級）|| 第一級の八〇%に相当する作業をこなせる者

三 ツリーチ・カテゴリー（第三級）|| ラーゲリ内において定められるた軽労働に適する者

四 オカー（O・K）オスウオボジジョンナヤ・カマンドの略称）|| 体の衰弱により作業を免除された者のグループ。関東軍当時、弱兵ばかり集めて訓練した錬成隊と同じような意図のもとにソ連側で考えられたもの。各ラーゲリのO・Kをどこかのラーゲリに集めて軽労働に就かせ、体力が回復すれば再び一般のラーゲリに戻して就労させるわけであるが、現実にO・Kと判定されれば、自分たちの宿舎の当番、便所の尿処理、ラーゲリ内の草むしり、炊事場の雑用等々、軽度の作業に第三級の者と一緒に従事していた。

第八話 白系ロシア人

一九八km地点で森林伐採に従事していた頃のことである。若いロシア人監督がやってきた。見たところ、焦げ茶色の上着と同色のズボン、ソ連軍の軍帽を冠っているが赤い星章はついていない。とすると彼はドイツ戦線で歩兵になった将校ではない。どこか気品が感ぜられるなかなかの美男子であった。我々に対する態

度も極めて紳士的であり、ノルマを上げるためにガムシヤラに罵声を挙げるようなこともせず気持ちのよい男であった。

ある日、作業休憩のとき、彼は流暢な日本語で「皆さんはいつか故郷に帰ることができるので羨ましいです」と漏らした。聴けば彼は白系ロシア人であると言ふ。そして満州国の東大と言われた建国大学の出身とも言った。「私には帰る故郷はありません」と淋しい顔が印象的であった。それらがあつてから間もなく我々の視界から消えて行つた。戦後三回にわたりタイシエツトーブラーツク方面に慰霊旅行の際に、クビトーク村長のキリチェンコフ氏等を通じ彼が健在であることを知った。彼の名はワシリビッチ・チェウソフという。

建国大学卒業後、満州国政府に勤務中敗戦となり、ソ連軍に逮捕されバム地区に受刑者として送り込まれ、我々とはまた違った苦勞をされたとのことであつた。昭和三十一年に名誉回復後、同胞の白系ロシア人とともにブラクーツに居住し、白系ロシア人からなる

囚人会の会長として、バム沿線で強制労働により死没した同胞囚人や日本人死没者の慰霊や墓地の調査発掘に尽力されているという。

亡国の民として数奇な運命を辿ってきた彼に深い同情の念を捧げるとともに、益々のご活躍を祈るものがある。

第九話 密告

第五病院の八病棟は、院内の端の方にぼつんと離れて建っている小さな独立病棟である。どんな病気が知らないが、健康者と変わりがないような病人らしからぬ患者が二十人ばかり在室していた。我々作業隊の者は関係がないので覗いたことはない。だが何か秘密めいた雰囲気包まれた病棟である。噂によると、この病棟は旧軍隊の内務班以上の厳格な規律で縛られた日常であるという。

その患者責任者はK軍曹という人物であつた。バム鉄道建設作業の本格化に伴い病院も奥地へ移動することになり、八病棟も解散消滅した。ところがK軍曹

は我々の所屬する作業隊に新入りとして入ってきた。

起居を共にするK軍曹は、三十年配でガッシリとした骨太の男である。口も達者で一くせあり気な顔である。満州のどこの部隊にいたのかと誰かが訊ねたが、二転三転と曖昧な返事しか返って来ない。もしかして彼は憲兵か特務機関にでもいたのでないかと密かにささやかれていた。そうなると軍曹の階級もあやしいものだ。入院のドサクサに紛れて偽りの階級章を襟に着用し、班長面をする者が当時はよく見受けられたものである。いずれにしても何か暗い感じのする男であった。

建築作業現場でのことであった。親しくなったロシア人監督がやって来て、材料を運ぶから手伝ってくれと言う。彼の後に従って暫く行くと立ち止まり、素早く周囲を見回してから「セルジャント・K・オン・サバーカ（K軍曹は犬だ、注意せよ）」と忠告してくれた。ロシアでは密偵のことを隠語で犬と言う。日本でも犬とは密偵のことを指す。偶然の一致か？

K軍曹は、ロシア人の間でも要注意人物として警戒

されていた。日本人仲間からも警戒され出した。我々の作業隊の中では猫を被っているのか目立たぬ存在で通しているが、食事は皆と一緒に食べるのを意識して避けているように見受けられた。即ち全員が食事を終わるころまで横になっており、それから起き上がり自分の寝台に座って、ひっそりと食べ始めるのである。ときたま我々には配食されたことのない骨付きの肉片をこっそりと時間をかけてしゃぶっているのを見かけた。今思えば何かの情報提供の報償ではなかったかと思う。

職業が容貌まで変えてしまうのか、警察将校に何かしっぽをつかまれた陰険な顔付きのK軍曹は、警察将校の走狗そうくとなり、いかなる理由があろうとも同胞を売るといふ破廉恥な行為に対し激しい怒りと軽悔の念を感じた。

その後ラーゲリを転々とし、第三三ラーゲリで経験したことである。私はそのとき作業隊の責任者をしていた。くたくたに疲れて宿舎に戻ってくると、毎日のようにニコライ所長のもとに各責任者の集合が命じら

れるのであった。ラーゲリの所長として上層部から課せられたノルマを完遂させようとして我々を呼びつけ督励するのであった。色白で小肥りのニコライ大尉は顔を紅潮させ、興奮のあまり腰のピストルを抜き振り回すときもあった。回を重ねるに従って慣れっこになつてしまった。

雪が降り始めた頃のある夜、乗り物に揺られている夢を見た。あまりに揺れるので目が醒めた。現実には足が揺さぶられているのである。何事かと慌てて身構えた。薄明かりの中で相手を透かして見ると警護兵が立っている。あたりを憚る小さな声で「カタヤマ・ダー」と呼びかける。返事をする。「中尉殿が呼んでおられるから一緒に来い」と言う。周囲の連中は昼間の疲れで全員ぐっすりと寝込んでいる。眠気の抜けきらない頭で慌てて靴を履き、警護兵に従って宿舎を出る。薄く雪の積もった深夜の道を警護兵とともに衛門まで歩く。詰所の明かりで警護兵の顔を見る。蒙古系の顔に伍長の肩章を着けている。初めての顔である。言葉も交わしていない。衛門を出てしばらく歩く。

「またお決まりのノルマのお叱りか？ 畜生、こんな夜中に呼びつけやがって」と思うと無性に腹が立つてくる。毎日、作業場を往復する道から少し横にそれた道のようなだ。立ち並ぶ倉庫の裏の道らしい。突き当たりには五坪ほどの小屋のような家があった。やつと眠気も醒め頭も常態に戻った。その時ふと浮かんだことは、いつもと違いなぜこんな時間に、それも初めて見る建物に呼ばれるのか？ ふと不気味な気分が一瞬間をよぎった。やがて警護兵はその建物の前で止まり、ここだと顎をしゃくって足早に引き返していった。扉をノックして「モージノ？（入ってよろしいでしょうか？）」と声を掛ける。「ダー」と応答があったので部屋に入る。

十畳間程の広さの部屋の中央に、塗料も塗っていない白木の粗末なテーブルに狼のような目付きの人相の悪い中尉が座っている。机の前に白木の椅子が一脚置かれていた。「サジース（座れ）」と高圧的な声が飛ぶ。いつも呼びつけられる所長のニコライ大尉ではなく、初めての顔の将校である。敬意を払って「スバ

シーバ（ありがとう）」と言って椅子に座った。その途端、中尉は日本語で「そのロシア語はどこで学んだのか？」と厳しい顔で畳み掛ける。この程度の初歩的なロシア語は二年もおれば誰でも身につくものである。私は抑留生活の中で独学で身につけたのだ、と説明した。青い瞳で刺すように私の顔を見ている。机上にはいつの間にか置かれたのかピストルが鈍い光を放っている。

そして関東軍当時はこの部隊にいたのか、部隊の所在地は、部隊長は誰か、所属隊長の名前は、そこでどんな軍務に従事していたのか等々、使い古して手垢で汚れた表紙のついた一冊の分厚い台帳のようなものを拡げ、訊問するのであった。

身辺にいる誰かが密告したのである。何か不都合なことをしでかして警察将校にしっぽをつかまれ、情報提供を強要されたので苦し紛れに密告者は、私を諜報関係者等と密告したのであろう。

私自身は何の関係もないだけに何等臆することもなく事情を説明した。いろいろと執拗な訊問が続けられ

た結果、どうやら疑念が晴れたようだ。鋭い視線も幾分和らぎを見せ始めた。台帳をボタンと閉じ「何か質問はないか？」と言ったので「ソビエトにはなぜ囚人がこんなに多いのか？」と質問したら「社会主義社会から共産主義社会に移行する際に生ずる敗残者が囚人である。例えば君たちは、松の木を斧で削って四角い柱を作るだろう。そのとき生ずる木っ端がすなわち囚人というわけだ。松の原木が社会主義社会で、完成した四角の柱である共産主義社会を作るためには木っ端が生ずることは必然のことなんだよ」と事もなげに言い放った。

ちよつと腑に落ちないところがあつたが、反論して強大な権限を持つ警察将校の逆鱗に触れれば忽ちどこかに連れ去られることを思い、彼のご意見を神妙に拝聴した。最後に「共産主義社会はいつ頃実現するのか？」と質問したら「スココーラ・スココーラ（もうすぐ実現する）」と胸を張って答え、もう帰つてもよろしい、ただし今夜のことは絶対に口外しないようにと釘を打たれて解放された。

取調べ小屋を出たときは張り詰めていた気分が一挙に緩み、ラーゲリまでの数分間の冷え冷えとした道はむしろ心地よかった。

宿舎に帰りボロ毛布にくるまり横になる。一面識もない警護兵が夜中に同じような身なりで多数の捕虜が寝ている所へ間違ってもせず正確に私を捜し出したということは、私の日常の行動が詳細に把握されている結果にはかならない。一体、誰か密告しているのだからか？身の周りで軀をかいて寝ている仲間たちを一人一人頭に描いてみたが分からない。無実の仲間を自分の保身のために密告するとは情けない奴だ。人間の屑だ。私は目に見えぬ密告者の仕打ちに腹が立って眠れなかった。

翌日、作業場に行く途中、記憶をたどり昨夜の訊問小屋の位置を皆と歩きながら素知らぬ顔をして探した。立て込んだ家々の間にその小屋の一郭を発見した。松の厚板を打ち付けた粗末で目立たぬ小屋であった。三〇cm角の小窓が唯一つ。それを認めた瞬間、あの悪夢のような情景がよみがえり背筋が寒くなった。

第十話 前田博先生との奇遇

入ソ間もない頃のことである。第五病院の作業隊での出来事であった。隣村のカスタマールに一〇五大隊と呼ばれるラーゲリがあった。この大隊は南満州で編成された大隊という。彼らは幸運にもソ連軍と戦闘を全然していない。そのため最下級の二等兵に至るまで、全員新品の被服を身につけ、防寒被服もたっぶり用意して入ソして来たという。その大隊から四十人程度の人員が病院開設に伴い作業要員として派遣されて来た。そして作業隊第一班ができた。入院患者の増加に伴い作業隊の人員に不足が生じ、そこで我々退院患者の中から作業要員を三十人程度募集して第二班が編成された。医療衛生業務はソ連軍の軍医、助医、看護婦、日本軍の軍医、衛生兵が担当し、その他の炊事、洗濯、入浴、大工、左官、理髪、鍛工、被服修理、靴修理、屎尿処理等、日常業務を作業隊が担当していた。

ある日の夜、第一班の宿舎に作業隊員全員が集められた。人事係のクロバヤー老少尉が玉川通訳を従えて

入って来た。大きな芯の横に丸い反射板がついている石油ランプを机の上に置き、点火すると電球のように明るく輝き、やすらいだ気分になった。当時は電球はなく、拾って来た缶詰の空き缶にぼろ布を芯にした即席石油ランプが唯一の光源であったので、人事係の持参したランプがとても明るく感じられたのかもしれない。

クロバヤヤ老少尉は、ガッシリとした骨太の体格で陽性な性格の将校である。「今夜、皆さんを呼んだのは皆さんの日本の留守宅の連絡先を聞くために集まってもらったのである。今から順番に一人ずつ聞いていくからよろしく」とのことであった。玉川通訳を介して順番に始まった。老眼鏡を鼻の頭にチョン乗せにしたクロバヤヤ老少尉は、漫画ののんきな父さんである。そして絶えず冗談を言って皆を笑わせる。順番待ちの時間を第一班の連中の寝台に腰を掛け互いに雑談を始めた。初対面の者に対しては、相手の名前、何県の出身か、満州の所屬部隊は、と誰しもが尋ね合うのであった。

ちょうど座った横に四十過ぎと思われる瘦せて皺の多い初年兵がひっそりと座っていた。一見して敗戦間際の七月の在満根こそぎ動員で召集された兵隊であることが分かる。私はその兵隊に「オイッ貴様の名前は何かゆうねん」と大阪弁で尋ねた。「ハイッ、自分はマエダヒロシと申します」と彼は答えた。「前田は分かるがヒロシはどう書くんや?」「ハイッ博士の博であります」「ふーん、前田博か。俺は貴様と同姓同名の者を知っている。世間にはよくあることや」と言ったら彼は「その人はどこの人ですか?」と興味を示した。「その人は、大阪府の池田市にある池田師範学校(小学校教員養成校)の先生をしておられた方だ」と答えた。「池田師範で教鞭をとっていた前田というのが、ここにいる私であります」と苦笑いをされた。「えーっ、本当ですか?」大阪府池田市から遙か六千kmも離れたシベリアの僻地での恩師との奇遇に、しばし声が出なかった。五年前の先生は、七・三に分けた頭に黒のロイド眼鏡をかけたスマートな先生であったことが思い出される。

改めて先生の顔をじっくりと拝見する。我々同様の丸刈り頭、顔はしなびた果物のように皺が目立ち、往時の面影は全然見当たらない。ロイド眼鏡は野蛮な古兵に殴られて壊されたという。敗戦間際のどさくさといえ、わずかの間の軍隊生活は大学教授の身にとつて屈辱の毎日であったことと推察し気の毒でならなかった。

中等学校当時、前田先生は週一回、池田師範学校から非常勤講師として来校され、一年間教わったことを昨日のことにように思い出す。

日本陸軍の慣習とは言え、恩師に対して横柄な言葉で応対したことをまずはお詫び申し上げ、次いでこのシベリアの僻地でお目にかかったことを喜ぶとともに、この不思議な因縁について考えさせられた。

前田先生のお話によれば、その後満州国の首都であった新京市（現、長春市）にある建国大学の教授として赴任され教鞭を執っておられたところ、七月の根こそぎ動員で召集され、ろくに訓練も受けぬままに敗戦となり、更にシベリアに送られたとのことであつ

た。

第五病院での作業も多岐にわたっており、捕虜という立場から筋肉労働が主であり、楽な作業はないに等しい。幸いにして作業班長が奉天（瀋陽）の日本人女学校の教頭をしていたインテリ班長であったので、彼の配慮からか、人事係のクロバヤ老少尉の助手として事務所に従事しておられると聞き、安堵したものであった。

しかし、臨時使役で駆り出されるときが間々あったが、その時は先生も例外ではなく作業員の一人として駆り出された。こんなとき肉体労働が不得手な先生の対応振りには気の毒で見とおれず、先生の代わりを引き受けて少しでも先生の負担の軽減に努めた。

翌年、病院から回復者や弱兵の一部の者がダモイ（帰国）の第一陣として若干名が出て行った。ダモイすると喜ばせて奥地へに連れて行くことはソ連の常套手段であることが骨身に染みている捕虜にとって、何の感慨もなく静かに見送った。先生もその中に組み込まれておられ、無事に祖国帰還を祈るとともに、帰還

の晩には私の自宅に健在である旨をせひ伝言して欲しいとお願いをした。

一カ月はどして、ひょっこりと看護婦のカチューシャが洗濯場へやってきた。ジェニア、トニーヤ、ターニヤの三人の洗濯婦のところへ遊びにきたのである。どうやら先日、帰国の名目で出て行った退院患者の一人に看護婦として添乗して行った様子である。我々に対し賑やかにしゃべりかける。彼女は生まれて初めて海を見たという。無限に広がる青い海、打ち寄せる白波、磯の香り、話に聞いたり本で見ていたが、現実を前に何もかも珍しいことばかりの連続で、とてもよかったと青い目を輝かせ興奮気味であった。岸壁に停泊する日本の汽船に乗り込むまで見送ったという。

間違ひなく先生は日本に帰られたのであった。私は更に三年間も抑留されて、本文で述べたとおり浮草のようにラーゲリを転々として昭和二十四年八月末口に故郷の土を踏んだ。

満州、シベリアと六年余りの外地生活から戻り心身

ともにやっと落ち着いた頃、父から一通の葉書を示された。前田先生から父宛のものであった。タイシェットの奥地で健在である旨書かれていた。国や県や市町村から何の音沙汰もなく生死の程も不明であり、毎日陰膳を供えていたというあの頃、先生から送られた一枚の葉書によって家族全員はどれだけ明るさを取り戻したことであったろうか？

改めて先生の厚いご配慮に感謝するものである。

第十一話 お猿の駕籠屋事件

一七八km地点、現在はチュクシャという大きな街になっている。本文で述べたように二六kmのカスタマー村にあった第五病院が、バム鉄道の本格的な建設計画の着手に伴い、奥地であるチュクシャに移動した。

建設間もない構内には至るところに松の巨木の根が転がり、その間、名のみ細道を衛生兵やドクトルが木の葉を踏みしだき病棟間を忙しく往復する状況であった。我々作業班の者はそのような環境を整備して、病院らしく道路を拡張したり建築の残木を整理し

たりする仕事に従事していた。

夏の午後のものであった。珍しいことに、この日は平常より早く作業が終了した。こんなラッキーなことは滅多にないことで、自然に頬が綻び、誰もが青空のように浮き浮きした気分になって解放された喜びに浸った。誰かが、楽しい気分を発散させるかのように突然、童謡の「お猿の駕籠屋」を歌いだした。

そこへ病棟から忙しく飛び出して来たツエリコファ衛生中尉が通りかかった。彼女は医師と看護婦との中間に相当するロシア独特の制度である助医という資格を持つ将校である。均整のとれた肢体の上に、病院で一番と言われる美貌の持ち主であり、常に清潔な軍服の胸に独ソ戦で授章された赤く輝く赤星功労賞と従軍記章を僱用し、磨き上げた黒の長靴の姿は一分の隙もない。惜しむらくは声が甲高くて早口であるところからヒステリーの渾名をつけられていた。一口で言うところ美人で気位の高い女性であった。

件の男は何の屈託もなく「エーッサ、エーッサ、エーサホイサッサ お猿の駕籠屋だホイサッサ 小田

原提灯ぶらさげて 日暮れの山道遠い道 ホラヤット
コドッコいホイサッサ」と歌っていた。

ツエリコファ中尉は、はたと立ち止まり見る見る美しい顔を紅潮させて相手の男を睨み据え、右肘を激しく上下しながら「今、何といった？」例の甲高い声で詰問した。相手の男は鳩が豆鉄砲を食らったようにポカンとしてツエリコファ中尉の方を見ている。近くにいた我々も何で彼女が怒ったのか理解できなかった。その態度に彼女は軽蔑されたものと思っただのか、ますます声高く怒り出した。

「通訳を呼びなさい。通訳を！」。駆けつけた通訳に激しく食ってかかる中尉のすさまじい見目は、日本人女性には見られない凄まじさがあった。何の理由をもって私に向かって卑猥な歌を口にするのか、先勝国の将校を侮辱した、直ちに所長に言って処罰してもらうから覚悟せよとのことである。

これは、日本語とロシア語の解釈の違いが生んだ現象である。この歌は卑猥な歌ではなく、りっぱな童謡として日本の子供たちに広く歌われている歌である。

当然、歌った本人はツエリコフア中尉に対して侮辱とか軽蔑の意志は更々なく、今日は作業が思いがけなく早く終わったので楽しい気分になり何の気なしにこの歌を歌ったのである。偶然にもそこに中尉が通りあわせ、この結果になった。どうか事情を了解してお許しを願いたい、この歌は日本の小学校で児童たちに愛唱されているりっぱな歌であることを熱心に説明し、陳謝に努めた。ツエリコフア中尉は事情はよく理解したが、この歌はロシア人にとっては猥歌と受け取る、婦人の前では今後絶対に歌うべき歌ではない、誤解を招く元になるということで、やっと一件落着となった。

数年前、ロシア民謡ブームの折り、ダークダックスの一行がモスクワの劇場でお得意の曲を披露した。カチューシャ、ともしび、一週間、娘さん等を歌いその都度大きな拍手を浴び、すっかり気をよくして次に日本歌謡の部として、事もあろうに『お猿の駕籠屋』を歌った。またもや、万雷の拍手を期待していてところ、どうしたわけか誰ひとり拍手を送るものもなく、一種異様な雰囲気に含まれ、聴衆の紳士淑女は互いに

困惑した表情で顔を硬ばらせているばかりで、ダークダックスの連中は連中で、打って変わった反応に驚き、何が原因であるのか理由が分からず一瞬、シラけた空気が漂った、とある雑誌に書かれていた。

この文を読まれた方々は原因は歌詞にあることを理解されたことと思う。外国で歌う場合、相手国の国民に失礼のないよう選曲に細心の配慮が必要であることを思い知らされたことであろう。

これと同じような事例を、もう一つ紹介しよう。あるサラリーマンで演芸会が開催された。そのときの歌謡曲の中に『城ヶ島の雨』という歌が歌われた。

日本人ばかりが聴く分には何ら支障がなかったのであるが、この種の催しには通常、ラーゲリの所長をはじめ幹部職員やその家族、警備隊員が客として来場してくるのであった。数々の日本歌謡が披露され、日頃ノルマ・ノルマで怒鳴り散らしているロシア人も、この日は相好を崩して大満悦であったが、『城ヶ島の雨』が歌われ出したときは一瞬、シラけた空気がロシア人を支配した。

演芸会が終わると同時に通訳が事務所に呼び付けられた。政治将校に厳しい顔付きで「城ヶ島の雨」というのは誰の作か？ 歌詞をロシア語に翻訳せよ、また歌詞の意味を説明せよと言われた。

この歌は日本語では何の問題もない歌である。通訳は、そのように説明した。政治将校は、歌の意味もよく理解した。だがこの歌は今後、いかなる理由があつてもロシア人の前で歌うことを禁止するよう命令する、と申し渡された。

この二つの歌には、ロシア語のタブー語が入っているのがこのような結果を生んだ。たかが歌謡曲も飛んだ波紋を拡げるものである。

ちなみに、お猿の駕籠屋と城ヶ島の雨の歌詞を挙げ、タブーの個所に傍線を引いておく。

お猿の駕籠屋

エーッサ エーッサ エッサホイサッサ

お猿の駕籠屋だ ホイサッサ

日暮れの山道 遠い道 小田原提灯ぶらさげて

ヤレホイきた どっこい ホイサッサ

エーッサ エーッサ ホイサッサ

城ヶ島の雨 北原白秋 作詩 梁田 貞 作曲

雨はふるふる 城ヶ島の磯に

利休風の 雨がふる

雨は真珠か 夜明けの霧か

それともわたしの 忍びなき

舟はゆくゆく 通り矢のはなを

濡れて帆あげた ぬしの舟

第十二話 水 晶

広辞苑によれば、大気中にできる水の結晶、六角柱状晶と六角板状晶とがあり、またこれらの組み合わされたものもある、と述べられている。一九八km地点にある第一ラーゲリで水汲みの作業に従事していたときのことである。四斗樽程の空き樽に針金の取手を着け、細目の松の丸太棒を通して前後を肩に二人一組となりラーゲリから三百m程離れた湿地の水汲場と炊事

場を往復するという仕事である。はた目にはのんびりとした作業のように見えるが、八十ℓ程の水を相棒と担いで運ぶのは結構辛い仕事であった。最初の数日は両肩が腫れ上がり、とても痛くて牛馬並みの重労働であった。そして、どんなに気温が下がっても水汲場だけは別格で、毎日規定されたノルマは果たさねばならなかった。それでも一般の作業兵からはなぜか羨望の目で見られていた。その謎はすぐに解けた。それは毎日千人分の食事を調理すると、なにがしかのお焦げが出る。そのお焦げが毎日、作業の終了時に水汲み一同に与えられるのであった。ただし宿舎には絶対持ち帰りには許されず、炊事場の裏の小屋で食べてしまうことが厳命されていた。

慢性的な空腹状態の一同にとっては、少々のお焦げなど問題ではない。久々に満腹感を今日も期待し、肩に食い込む八十kg余りの水の重さを相棒とともに堪えて、この仕事が一日でも長く続けられることを十人の仲間と共に祈った。

表題から少し離れたが、そのような作業の明け暮れ

の中で経験したことである。それは非常に寒いある日のことであった。水汲場に到着すると、持参した鉄棒で水面の氷を割り、バケツで水を汲み上げ樽に入れて例のとおり運搬する。

汲み上げた水が油のように粘った現象に出会った。樽に入れるのを一瞬やめてバケツの水のそばにしゃがみ込み、しばらく寒さも忘れて観察していると、一陣の風がバケツの表面を撫でるように軽く通り過ぎる。その瞬間、ほとんど目につかぬほど微細な白いゴミのような物質がバラバラと水面の上に散らばり、たちまちゴミ様のものが数を増し、そして一粒一粒が肉眼で大きく見える程に成長していく。

その一粒一粒が規則正しく六角形の結晶であり、その六角形も一つとして同じものではなく微妙に違っていて、余りの美しさに感嘆する間もなくそれらは薄いオブラート状の氷に成長し、見る見る厚みを増して厚い氷と化し、バケツの表面を覆っていくのである。初めて見る自然のすばらしい造形に妙に心は躍った。

現代新百科事典によれば、弘治一（一五五五）年、

雪の結晶をスケッチして出版したのはスウェーデンのマグヌス大僧正であったという。その後ドイツの天文学者ケプラーは雪が六角の結晶であることを発見した。フランスのデカルトという大家も雪の結晶を調べ、そのスケッチを残している。アメリカのペントリーは四十年間にわたり雪華の顕微鏡写真を撮って出版し、科学者たちに雪の結晶に対する注意を呼び起こした。

我が日本では天保三（一八三二年）に下総古河藩主の土井利位が、雪華を虫メガネで調査し『雪華図説』を出している。中谷宇吉郎博士は、昭和七年以来、北海道で二五〇〇枚に及ぶ雪の結晶の顕微鏡写真を撮って科学的な分類を行い、七種類の基本的な結晶型に分けた。なお、博士は実験室の中で（人工雪）の結晶を作ることに成功し、雪の結晶型は主に結晶ができるときの上空の温度と湿り具合などによって決まるものであることを確かめた、と記述されている。

ここ、一九八km地点の当時の気温は、連日マイナス四〇〜五〇度の低温が続いた。地域一帯が超巨大な天

然冷凍庫であった。その中で実験用の器具、設備も皆無、更に専門的な知識もない、ないないづくしの大自然の環境で、短時間ではあったが暫し抑留の身を忘れるほど精神的に満足した思い出は、今もツララの下がる厳冬の風景を見るとき、当時の思い出が頭をよぎるのである。

第十三話 BK（日本人警護員）

既刊されている多くのシベリア抑留記に書かれているとおり、捕虜がラーゲリから作業場への往復時には、必ずロシア兵が通称マンドリンと呼んでいる自動小銃を肩から胸にかけてマンドリンを演奏するような格好に擬し、五列になって歩行する隊列の後尾から「ダワイ・ブイストラー」と連呼しながら追い上げるように歩かせるのであった。入ッ当時は、日本兵は野蛮人のような人間だと教育されていたのか警戒心過剰で、絶えず銃を振り回して威嚇と罵声の繰り返しであった。下痢などで体調を崩している者にとっては鬼のような存在であった。言葉は通じない、動作は鈍く

なる。短気なロシア人警備兵は威嚇射撃をしたりしてどなりまくる。

やっと作業場に到着すると一定の線を定め、その線を越えると射殺すると命令、自分は捕虜に命じた焚き火に終日手をかざして時間を過ごす。面白いことには、警備兵にとっては作業が終わるまで一人の逃亡者もなくラーゲリまで連れ帰ることが任務であり、作業実績等には関係がない。一方、作業監督にとってはノルマ完遂が至上命令である。そこで利害が相反する両者が口角泡を飛ばし、つかみ合わんばかりに口論するのであった。

入ソ当時は以上のような状況であったが、日時の経過とともに日本人の気質を段々とのみ込み出してきたのと同時に、我々も片言ならばロシア語も話せるようになり、両者は急速になじみ出した。往復の際、自動小銃を振り回すこともいつしか止んだ。作業場での休憩の時、自動小銃を日本人に触らせて平然としている警備兵も出てくるようになった。タバコも分け合って吸うことには何の抵抗感もない茶飯事となった。警備

兵の名前も覚え、彼らの出身や家族のことなども話し合える間柄にもなった。

昭和二十三年、一四二km地点の三三ラーゲリでは、ある日突然警備兵が姿を消し、守衛のソ連下士官と兵だけになった。それに代わってBKと黒字で大書した腕章を左腕にはめた日本人が現れた。ソ連当局の指示であろうか？ 何よりも逃亡しない。更にソ連兵より数段優れた知的能力は作業に当たったの処理や企画面に遺憾なく発揮されて、日本人を野蛮人のように教育されていた先入観を改め、ソ連兵による警備兵制度を撤廃したのであった。BKとはワスポマガーチナヤ・カマンドの頭文字をとったもので、直訳すれば（君たちを援助するグループ）、平たく言えば日本人警備員ということ、我々はベーカーと呼んでいた。

もちろん、ソ連当局の上層部からの指示であろう。顔ぶれを見ると、誰が人選したのか不明であるが、多分政治将校の差し金であろうか、いわゆるアクチーブ（積極分子）と呼ばれている連中が任命されている。我々が作業場で過大なノルマを課せられ汗水を流して

いても、ソ連警備兵と同様、一日中作業場で我々の作業ぶりを平然と眺めているのであった。

彼らの任務は、文字通り日本人捕虜の警護を第一義とされているが、むしろ作業場で各人の言動からそのグループの民主化度をさりげなく観察したり、反動分子の摘発等、思想的面の監視に重点を置いていた節が多分に感ぜられた。君たちを護る要員とは表向きで、実際は捕虜の思想、行動の監視を通じて作業成績の向上にも深い影響を与えていた。自国の兵隊を使わず日本人同士でその行動を監視、牽制する手法は、ソ連人の老獪さの一面を窺わせるに足るものである。

彼らは肉体労働は免ぜられている代わりに、『日本新聞』をはじめ思想教育用の図書や教材として、夕食後疲れきった我々を対象に唯物論やソ連共産党の歴史等を連日のごとく強制的に講義を実施した。その中味は、高い学歴や教養で裏打ちされたものでなく政治学校等で教えられた範囲から出していない。更にエスカレートして難解な試験を全員に課すほどにもなった。今でも試験問題を覚えていゝる。「金融寡頭政治の武器

とは何か」「血の日曜日の意義について述べよ」「戦艦ポチョムキンの反乱背景について述べよ」等々、通り一遍の講義では理解できない問題が出題された。昼間はノルマでクタクタに絞られ、夜間は学課で苦しめられ、何のメリットもないその他大勢の捕虜の目には、ラーゲリの所長も歯が立たぬ絶大な権限を行使する政治将校の強力なバックを背景にBKの腕章を誇らしげに着けてラーゲリ内を歩き回る警護員の姿は怨嗟的であつた。

第十四話 特権階級（ノーメンクラトゥラ）

ソ連当時、彼の国では共産党員はエリートとして職場での地位、権限、待遇等は非党員と格段の差があつた。だから赤革の党員手帳を手にするために、少年、青年時代からピオネール（共産少年団）、コムソモール（共産青年同盟）に競って加入し、その間、レーニン、スターリンの教義を基とした理論と職場での日常実践活動の二面から絶えず厳しい評価を受け、やっと党員候補に辿り着く。更に同様の試練を乗り越えて初

めて共産黨員というピラミッドの頂点を極めることになるという権威のあるものである。

趣旨に賛同して入党申込書に会費を添えて即、黨員という簡単なものではない。それだけに職場での指導力、責任等は重いが、反面、権限や地位、給与等では優遇されている。例えば黨員のみ利用できる保養所等は広々とした敷地にふさわしい施設、一般家庭では見られない家具調度類が整えられ、そこで黨員は優雅な休暇を楽しめるのである等々、以上の話はパン工場のニコライ工場長（黨員）から聞いた話である。

そのように、一般人には享受できない特権を持っている階級と言える。それゆえに一般のソ連人は彼らを指してノーメンクラトゥーラと呼んでいる。

日本陸軍にも特権階級があった。帽子、被服、履物は将校と兵は外面的には誰が見ても明確に分かるほど区別されていた。給料、住居、食堂、集会所、入浴場、便所等に至るまで区別された。

戦前の役人の世界でも高等官と判任官や雇員は明確に差別されていた。給料は当然のこと。そして執務机

の大きさ、緑色のラシャの下敷きの有無、椅子にも背もたれと肘掛けつきは高等官用、背もたれのみは判任官用とされていた。更に食堂から便所に至るまで明確に区別され、居住する住宅（官舎）にまで及んでいた。

さて千人単位の間人が生活するラーゲリでも特権階級が構成され、それらが指導権を握りそれなりに運営されていた。

入ソ当時は、ソビエト当局は集団統制手段として日本陸軍の階級制度をそのまま利用して、混乱した環境を乗り切るべく上位階級にあつた将校を指導者として任命した。大隊長、中隊長、小隊長、班長と旧軍隊の名称をも踏襲した。しかしソ連側では兵科将校も各部将校も混同して上位階級の将校を長に任命したケースもあり、その結果、統率力の弱い将校がそれぞれの長になった場合、部下の苦勞が多かつたようである。当時の幹部連中は捕虜の激しい労働と空腹の現状には目を外らし、法的に労働を免除されていることを盾に労働に従事せず現場監督として作業場にたたずみ、その

ほとんどがソ連側の監督の意のままに、または迎合して、ひたすらノルマ完遂を督促するのが多かった。その間、作業や生活環境も何ら改善されずにきたことは、ソ連側と何らの折衝もなく、あっても唯々諾々と過ごし自分たちの保身にのみ過ごしてきたのである。

横暴な将校がラーゲリの一角に日本座敷を造作し、コック出身の捕虜に特別食を調理させていたことが過去の文芸春秋誌上に「シベリア精養軒事件」というタイトルで書かれていたが、入ソ当時はかつての日本陸軍の悪弊が当然のように持ち込まれた結果である。

このような不合理な環境に対し一部の若い捕虜の間に不満の炎が広がり始めた。入ソ当時の混乱もやや落ちついた二年目の終わり頃からソ連軍政治部の後押しで胎動を始めた反動闘争、民主化運動の影響で、五月兩式に将校はどこかのラーゲリに移されて行った。そしてその後には大隊長に代わり委員長なるものが誕生した。

それに付随して中央委員なるものができてきた。その選出方法は全員による選挙で選出された。意欲のある者が立候補し、立候補の公約信条をセメント空袋に大書してラーゲリの炊事場入口等の目立つ所に貼ったり、各バラックに立候補挨拶に回る等々、選挙運動を展開、最終は投票で決定した。

当初は、学校教員や新聞記者等の経歴を持ち弁舌の立つインテリ層が就任しスタートしていったが、そのうちに、政治将校に目をつけられて地区政治学校に派遣された積極分子が卒業して地区内の各ラーゲリに配置され出した。それらのアクチーブが立候補して委員会を組織するようになった。委員長を頂点に、教育宣伝部長、生活部長、労務部長、編集局長等の部制を布いて運営するようになった。階級章は既に撤廃され何の権威もなくなった。自分の知る範囲内でのことではあるが、このアクチーブになっている者の多くは、なぜか満蒙開拓義勇軍や南満州鉄道出身の若手職員等、いわゆる在満と呼ばれている若者が多かったという印象が深い。その要因として考えられることは、若年層

で世間ずれがしてないから、吹き込まれた共産主義の世界がバラ色の理想世界に見え、一途に飛びついたのではないかと思っている。

ともあれ、ビンタと絶対服従の桎梏を断ち切り自らの手で自主的生活を勝ち取ったことは、最底辺で精神的、肉体的に苦悩の毎日を強いられてきた若年の捕虜たちにとって、自由への第一歩を踏み出したと歓迎された。

だが、委員長をはじめ中央委員たちは、昔の大隊長や幹部将校等が別棟で起居していたように「友の会」の看板を掲げた別棟で生活していた。内部生活は、當時者でないので分からないが、外部から窺う限り彼らの衣食住は一般の捕虜に比して格段に優遇されていたことは誰しも認めるところである。中でも労働に関してはソ連側から作業免除という手厚い配慮を受けていた。このような面から見る限り特権階級と言えるのではないか。

また、作業免除とまではいかないがラーゲリ内の特定作業に従事する者も、特権階級に準ずるものと言え

よう。即ち通訳、ノルマ計算係、炊事、理髪、医務室、縫工、靴工、浴場、洗濯、機材修理、収容所長官舎当番等の従事者である。

これらの作業は、寒風吹きすさぶ屋外で空腹とノルマにさいなまれる作業から比較すれば格段に恵まれた職場と言われ、一般捕虜からは羨望の目で見られていた。これらを引くくめて「収容所貴族」とも呼んでいた。

第十五話 政治将校（オペラチーブヌイ・ボルノ

モチン）

ラーゲリで「政治部」「政治将校」と呼ばれているソ連軍将校は、階級も年齢もはるかに上位にある収容所長すら政治将校には恭順な態度を示している。

その根源にあるものは、政治将校はソ連社会でのエリートである共産党員である。そしてラーゲリに勤務する赤軍系統のソ連軍将校たちとは別個に存在している共産党政治部に所属する将校であるという。捕虜の間ではモスクワから直属と噂されていた。いずれにし

ても彼らの任務はラーゲリでの反ファシズム活動、民主化活動（共産化）推進を主とし、手足となるアクチーブたちを通じ、労働、所内生活、学習等すべての面にわたり強力な権限を行使した。だから彼らのことをクリトールヌイ・アフィツェールとかアジテーション・プロバガンド・アフィツェール（思想担当宣伝扇動将校）とも呼ばれていた。

捕虜の間で政治将校と呼ばれていたのは、表題に書いた者のことである。これは上記の思想教育等を任務とする政治将校を「明」とすれば、その反対の「暗」に当たる任務を持っている将校（オペラチーブヌイ・ボルノモチン）で、捕虜の生殺与奪の権力を持つ者として一番恐れられていた。

華やかとも言える宣伝扇動の集会で捕虜全員の前に常に姿を現す将校ではなく、職業柄が何か暗い影を持つ陰的なタイプである。これはかつての日本陸軍の憲兵や警察での特高警察官に比肩すべき二つの大きな権限を持った将校という任務である。その強大な権力は年齢や階級にかかわらず付与されており、文字通

り、ある業務について全権を持つ者という意味の検察担当将校として辣腕うづなを振るった。その業務の性格上、公衆の面前にはほとんど姿を見せない。彼と何らかの接触を持った者以外には顔を知られていない。将校の服装をしているが、その身分はゲ・ペ・ウとかエヌ・カ・ゲ・ベ等と呼ばれている秘密警察に属しているともいう。

ラーゲリ内外での犯罪者摘発や、反動分子、ソ連やスターリンを誹謗する者、日本軍当時に憲兵や特務機関員であった者、警察官、判事、検事等の前職者等を摘発するのが主とした任務であったようだ。

捕虜の中で窃盗等の犯罪を犯した者を取り調べの際、奥地の懲罰ラーゲリ送りとか帰国を取り消す等と恫喝どくわくする半面、帰国を餌に懐柔したりして密告者をつくり、彼らの密告により暗夜ひそかに該当者を呼び出して長時間にわたり執拗な、陰湿な取り調べを行なう。一度でも取り調べを受けた者は、あの悪夢のような思い出を終生忘れないであろう。

第十六話 ロシア人と音楽

昭和二十年九月、遠くシベリア奥地に移送されるとは夢にも思わず綏芬河からソ満国境を越えた最初の街グロデコフ郊外の広大なライ麦畑に放り出され、二週間程、野宿生活の日々を過ごしていた。畑の横は沿海州の各都市に通ずる街道であるのか、満州で分捕った戦利品を山のごとく積み込んだおびただしいトラックが黄色い砂埃を巻き立てて終日我々の目の前を走り去って行く。それらを見る度に言い知れぬ屈辱感を味わった。そのトラックの中にソ連兵ばかり乗っている車両が時折見受けられた。

戦塵に汚れた服装ながら、いずれも勝利の優越感に浸った嬉しそうな顔付きをして歌を歌っている。車両では誰かがアコードオンを伴奏している。歌詞は分からないが、とても美しい曲で今でもメロディは覚えている。

どの車両でも同じ曲であったから多分戦勝に関連した歌であろうか？ ロシア音楽といえは『ボルガの舟歌』『ステンカラージン』程度しか知らなかったが、

抑留生活中にいろいろな機会に耳にしたロシア音楽のよさとか、ロシア人の音楽好きなることを知ることができた。病院洗濯室では大柄なロシア人洗濯婦が仕事の合間に毎日、日課のように何回も合唱するのであった。今では日本人に定着したあの『カチューシャ』『ともしび』その他、素朴な民謡を飽きもせず歌い続け、耳を楽しませてくれた。『石の牢獄にて』（カメンナヤ・チュリマー）という歌は、私にとって特に印象深い。哀愁に満ちたメロディは当時の我々の心に深く響くものがあつた。いつか先任者のターニヤが、理解しやすいように単語と身振り手振りを交えてこの歌を解説してくれた。

昔、ある地方で善政を施し多くの地域住民から大変慕われた長官がいた。その長官には可愛い一人娘がおり、幸せな日々を送っていた。ある日、誰かの讒言により長官は突然逮捕され、どこかに流刑されてしまった。娘は何年もかかって父の行方を尋ね回り、やっとその場所が判明した。娘は長く苦しい旅を続け、やっと辿り着いた所は僻遠の地にある石の牢獄であつた。

父は不運にも娘が到着する前日に処刑され、娘は物言わぬ父と対面し泣き崩れた、ということを書いたものである。

先年、イルクーツク・タイシエツト・ブラーツクへ墓参の折、若いロシア人数人にこの歌を知らないかと当たってみたが、知らないという返事ばかりが返ってきて残念であった。

ブラーツクのホテルでの昼食のとき、遠くから風に乗って美しいメロディが流れてきた。四十数年前に、あの洗濯場で何度も聴いた『オーハラショウ』という歌である。私は中座して歌声のする方へ走って行った。そこには短い夏を惜しむかのように緑樹の木陰で中年の婦人たちが二十人程集まり、手擦れのした歌集を手に熱唱しているのであった。

偶然にもあの懐かしい歌を聴き、当時のトリーニヤ、ターニヤ、ジェニアの美しい三部合唱が脳裏に浮かび上がり暫く楽しい気分であった。昼食の席に戻ると折しもステージでは楽団のアトラクションが終わりに近づいていた。日本人客にサービスの意味か『ボルガの

舟歌』『ステンカラージン』『ともしび』等が演奏され、そして最後に『満州の丘』で終わった。

何かの本で読んだことを思い出した。ロシアには世界的に有名な作曲家、声楽家や音楽家が多く生まれている。チャイコフスキー、リムスキーコルサコフ、ムソルグスキー等々、またスクリャーピン、ラフマニノフ、プロコフィエフ等のピアニストたち、シアリアピン等の声楽家と多くの逸材が名を連ねている。スターリンは共産主義社会を建設するための強力な武器として芸術家、特に音楽家を厚遇した。

その一例として、独・ソ戦争が熾烈を極めていき、多くのソ連人が戦線に駆り出されて行く様を見て、若き作曲家のショスタコービッチは愛国の熱情もだしがたくスターリンのもとに「私も即刻、戦線に召集して欲しい」と直訴したが、スターリンは深く頷いて「君にはほかの者ができない音楽という重要な任務がある。君はこの音楽を通じて銃後の国民の戦意を高揚しソ連を勝利に導くよう協力してくれ」と言われ、戦線に出ることを許されなかったという。スターリン

は政治的目的達成上にも音楽を巧みに利用して人心を収攬したのであらう。

一般のソ連人は、日本人に比べて美声者が多く、また楽器の演奏ができる者が多い印象が強い。長い長い冬を屋内で過ごす生活習慣が音楽好きの国民を作り上げたのかもしれない。

昔から音楽を好む者には悪人はいないと言われるが、自国へ帰るトラックの上で戦勝に酔いしれたソ連兵が惚れ惚れとする美声を張り上げて歌い去る姿を何度も見ると、この兵隊たちがあの満州の街々で鬼畜のごとき悪逆な蛮行に手を汚してきた同一人物かと思うと、音楽愛好者は善人と一概には言えないという思いは今も消えていない。

第十七話 登録文書のこと

シベリアのパリとも呼ばれ、また森の都金沢市と姉妹都市でもあるイルクーツク市から西北へ約七百kmのところ、第二シベリア鉄道（通称バム鉄道）への入り口に当たると、タイシエツト市郊外二六km地点、荒野の

中にポツンと建っている「第五病院」でのことである。時は昭和二十年十月下旬から二十一年の春頃までのことだった。

この地区に送られてきた日本軍将兵は、ソ満国境近辺に配置されていた者が多く、日ソ開戦に際し真先に交戦した結果、戦塵にまみれたポロポロの夏の軍服に口の開いた軍靴と乞食同然の服装で、トウキョウダモイ（日本帰国）の虚言に操られ、二週間―二十日余りの長途を家畜同様に有蓋貨車に横になることも不可能な程過剰に押し込まれ四千km余りの旅を強いられて、疎林の中に、唯一本の線路のレール止めぎりぎりのところで辛うじて列車は停車した。プラットホームも何もない赤土の剥き出しの地面の上に全員下車、休息のいとまもなく雪のちらつく中を直ちに奥地へ徒歩で出発、長旅でふらつく足を踏みしめながら原生林深く入って行くのであった。夕暮れ近い鉛色の空から非情にも雪が強く降り出し、背中を丸めて行進する兵士の上に白く積もり出す姿が何とも物悲しい風景であったことは終生忘れられない。

そして到着した密林には家もなく、満州からの手持ちの一枚の毛布を被って雪の降る森の中で一夜を過ごし、長旅の疲労もそのままに休息も与えられず、すぐに飯の住居をつくる一方、過大なノルマのもとに待ち受ける原生林の伐採、道路敷設、鉄道路盤建設等の重労働に駆り立てられていった。

その労働に値する食糧は収容所幹部の手で横流しされて適正に配給されず、更に輪をかけて旧軍隊制度の悪弊がそのまま持ち込まれ、上級者や古兵が大きなパンや実だくさんのスープを当然のこととして受け取り、若年の下級兵や高年の召集兵の食事は小さなパンと実の少ないスープが与えられた。反面、彼らの分まで、労働はもちろん、使役やベーチカ当番等は当然のごとく課せられた。

昔から日本人に太陽と米の飯はどこへ行ってもついて回ると言われていたが、ここシベリアでは通用しない。米に代わって馬糧用の高粱や粟、ライ麦粉等、かつて口にしたこともない穀物と黒パンが主食として配給され、ジャガイモの屑芋、キャベツ外葉、牛豚の骨

や内蔵、血液等、家畜の餌に等しい材料からなる食事であった。

電灯の代わりには、ポロ布に石油を浸した即席ランプや白樺の樹皮を燃やして照明とし、入浴も洗濯もままならず、垢だらけの体は虱と南京虫の繁殖場と化し、かかる不衛生な環境は時を経ずして恐ろしい結果として現れてきた。

連日、夜となく昼となくおびただしい入院患者がトラックや馬車で管内のラーゲリから送られてきた。当時は病院とは名のみ、数多く点在するシベリア監獄の一つを転用したに過ぎないこの施設では、医薬品も医療器具もない。ただ数人の日ソ軍医と衛生兵、ソ連人看護婦がいることで病院という体裁を保っていた。

鉋もかけられていない松板で作られた二段ベッドに汚れた夏の軍服のまま横たわり、持参した一枚の毛布にくるまり、ひたすら回復を待つのみであった。当然、助かるべき生命が、何の医療の手も差し伸べられないまま、いとも簡単に尊い生命が奪われていく事実を何度も見ながら涙した。

入ソ当時の大部分の患者は栄養失調、発疹チフス、赤痢等が挙げられ、将兵の中で最も死亡者の多い階層は若年兵と高齢の召集兵であった。

更に不幸なことに、昭和二十年の冬から二十一年の春にかけて近年にない寒気の厳しい年であったという。これらの悪条件が重なり、厳寒の日々、一日に二十人前後の死者が出ることは連日のことであった。屍室に運搬する担架が足りなくて、梯子の上に死体を載せて運んでいる場面に何度も出くわした。唯物論のお国柄か人間も死んでしまえば一個の物体とばかりに、着ている下着は全部脱がせて全裸にして埋葬するのであった。零下四〇度の世界は死体を忽ちにしてマネキン人形のごとく無情に凍らせてしまう。せめて下着だけでも着せて葬ってやるのが死者への思いやりではないかと懇願するのだが、この国の人たちには一向に通じない。

死体埋葬は人目を避けるためかいつも日没寸前の時間が選ばれた。白一色の雪と鉛色の空、薄暗い光りのもとで、触れ合えば金属的な音がする程硬く凍りつい

た死体を一〇体前後馬糞に積み込み、ぼろ毛布で覆って吹雪の中を近くの山腹にある墓地へと走る。そこにはツルハンも刺さらない硬く凍った凍土を溶かすため、伐採した松を積み上げて巨大な焚き火を前夜から焚き、翌朝表土が三〇cm程度軟化したところを大急ぎで掘る。この作業の繰り返しにより五〇体が埋葬可能な墓穴が予め五カ所掘ってあった。その中に頭を東向きにして一体ずつ梯子で降りして並べていく。旬日を経ずして満杯になると雪をかき集めて墓穴を覆う。

土が軟化する春先に改めて覆土をする。まないた大の板に五十人の死者の姓名をインク鉛筆という変わった鉛筆でロシア文字で書き込み墓穴の上に立て掛ける。一、二カ月も経って墓地へ行けば、風雨にさらされて死者の姓はほとんど消えている。果たして、この墓地に眠る死者の姓名は祖国日本に通報されるのであろうか。この思いが当時から頭の中にこびりついていった。

昭和二十二年の春のことである。前年の秋、タイシュエット二六km地点から一七八km地点のチュクシャに

移転した新築の第五病院に勤務しているとき、突然に、病院側から一人一人に一〇cm程に切った包帯に桁数の多い番号が書かれたものが渡された。白い包帯に水のような液体で書かれている。暫くすると黒く発色して数字が読めるようになった。ソ連には墨汁がないので硝酸銀溶液で書いたのではないか？ その番号が本人の固有番号であるから上着の左胸に縫い付けるよう命ぜられた。

通訳の言によれば、捕虜番号ということである。同時に夕食後から一人一人が別室に呼ばれ、ソ連人事係将校と通訳との三人で捕虜番号に基づく「登録文書」が作成された。その中味は、姓名、生年月日から始まり、出生地、入隊までの住所、職業、宗教、学歴、兵科、階級、軍隊における地位、更には身長、体格、毛髪の色、眼、鼻等の顔の特徴に至るまで詳細な調査項目で埋められており、紙不足のソ連に似合わない上質の厚紙に、それら項目が印刷されていた。日本人通訳を介して人事係将校が項目を埋めていく。一人当たり二〇〜三〇分は経過したのであろう。

人事係将校の説明によれば、この登録文書は捕虜一人について同文のものが三通調整され、一通はソ連政府、一通は日本政府に送付され、残りの一通はラーゲリに保管される。本人が他のラーゲリに移動するとき、この文書も本人とともに移動先のラーゲリに引き継がれる。このように登録文書は常に本人と共にあり、祖国に帰るまでついて回る。もし不測の事態が生じてもこの登録文書を通じて日本政府に通報されるることであった。

時を同じくしてこの時期にモスクワからの命令と称して、死没者の取扱いに関しては清潔な下着を着せて松板で作った寝棺に納め、両手は腹の上に組み登録番号を記入した木札を手首に結び付けて一体ずつ埋葬するように改善された。埋葬箇所にも登録番号を明記した木札が墓標として立てられたが、残念なことにか月程で番号は消えてしまうのであった。

思えば長い長い時間の末、やっと人間らしい扱いを受けられるようになった。入ソ当時、マネキン人形か冷凍マグロのように扱われた多くの友の不憫を思い出

し新たな感慨を覚えた。

日本が主張する関東軍や在満民間人からなる百万人近くの抑留者に対し、先般、やっと重い口を開いてソ連の発表した数は五十九万四千人であった。

もっと早い時期に登録文書が整理されていたらこのような数の開きも出ず、より正確な数が把握されていたことであろうと思う。今となつては残念に思えてならない。

第十八話 黒パン

抑留者にとつて、黒パンにまつわる各人の悲喜交々の思い出は、それだけでも一冊の本になるほどの豊富な内容のものになるだろう。私と黒パンとの出会いは、沿海州のグロデコフ市郊外のコルホーズのライ麦畑に放り出され、遠くタイシエツトへ抑留移送の長旅への待機中のことであつた。遙か彼方まで刈り取つたライ麦の枯れた株の残る広大なコルホーズ（集団農場）の各所に千人の兵士が浅い穴を掘つて、その中に枯れたライ麦の麦わらを敷き詰め、屋根もなく青天井

の下で神代時代さながらの原始的生活を営んでいた。

ある日のこと、一台のトラックが入つて来た。少し離れたところから眺めていると、大量の焦げ茶色のレンガのようなものを降ろして走り去つた。我々は炊事用のカマドでも作るのではないかなどと噂していら、その日の夕食に一切れずつ配給された。大量のレンガと思つていたのは黒パンであつたのである。日頃見慣れているパンとは異なり、濃い焦げ茶色で独特のすえたような香り、手にするとずっしりとした重量感、口にするときなみそ漬けの古たくあんとそっくりの味であつた。あまりにもまずい味に呆れて吐き出す者が多く、また独特の香りから、腐っているのでは？と警戒して捨てる者も見受けられた。だが迫りくる空腹には勝てず、まずい、臭いと口説きながらも口にする者が増えていき、やがて苦情は霧散してしまつた。

イルクーツク州タイシエツトの第五病院を退院し、引続き病院の作業兵として真つ先に従事したのは黒パン工場のパン焼き職人であつた。

誰しも食物関係の作業場は魅力があり、炊事場やパ

ン工場には志望者が殺到した。パン工場もご多分に漏れず三人の要員に対して二十人近くの志望者があった。私は、学生時代に若干の製パン理論と実習経験があったが、家業がパン屋であり、小学生の時から家業を手伝っていたと言ったら即座に採用になった。後で聞くところによると、志望者はパン焼の経験のない者がほとんどであったという。

ところでこの職場は病院から二百m程離れたところであり、工場は煉瓦造りのパン竈(二m×四m)が二基と湯沸かし釜一基、水槽一基、木製醱酵槽一基、パン棚等からなり、シベリア監獄時代からの古い原始的な工場であった。

工場長は六十歳代のミハイル、四十歳代のイワノフとマルコフと称する三人のロシア人四人と、日本人は稲益伍長、川原上等兵、私の三人であった。囚人とはいうものの、凶悪犯罪を犯した者ではなく善良な農民を思わせるタイプの者たちであり、かつて日本にあった治安維持法に相当する悪法、ソ連刑法第五八条に引っかけりシベリア送りになったのではないかと思う。

試みに、仕事の合間を見て片言のロシア語で「スターリンはどう思うか?」と問いかけたら、途端に人相が一変し憎悪に満ちた顔付きになり「スターリンの馬鹿野郎。糞食らえッ」と大声でどなりつけ、足下に「ピシッ」と大きな音を立てて必ずつばを吐くのであった。

さて、パン工場の一日はまず八〇kgもあるムカ(ライ麦粉)を倉庫から工場へ担いで運搬する。病気が上りの四〇kgの体重の倍もある巨大な布袋は一人で担がれず、ロシア人の手に肩で乗せてもらう。彼らは慣れた手つきで持ち上げる。工場に運び、醱酵槽にライ麦粉をあける。風呂の温度程の温湯を入れ、ドロジーと称する野生酵母を利用した酵母液と岩塩を入れ、それを六人の手で攪拌するのである。人力ミキサーというわけである。一、二時間放置して醱酵させる。

その間に戸外へ出て薪作りである。直径七〇―八〇cmクラスの松を二人挽き鋸で七〇cmのコロに切る。すべてが初めてのことであり、一コロ切るのに四苦八苦していると、あまり遅いのでロシア人が工場から助太

刀に飛び出して応援してくれる。一〇〇kgクラスの巨体から出るエネルギーは瞬間に松の巨木を数個のコロに挽き切り、更に斧で片っ端から叩き割っていく。

体力のない我々は専ら薪運びに回る。原始的なパン焼竈薪を四カ所に分けて入れ、点火する。

休む間もなくパン型の内部に食用油を塗る。一息つく暇もなく、ほどよく醗酵を終えて酸っぱい香りを工場いっぱい漂わせたパン生地をパン型に手早く入れる。すべて手作業で進めていく。ラバーターと称する長い柄の着いたヘラの上に生地を詰まったパン型を載せて竈の奥から順番に入れていく。スイスイと手早く竈に入れていく手つきは相当年期が入っている。手早く入れ終わると竈の蓋を閉めてやっと一段落する。二時間ほど焼くとでき上がり。一服する間もなく次の仕込みに取りかかる。やがて時間が来たら例のラバーターで焼き上がったパンを取り出す。型から焼き立てのパンをヘラで取り出しパン棚に並べる。

一回に三百個程が焼き上がる。一日四回の工程であり、朝六時から夜十一時近くまで働かされ、近くの

ラーゲリからは焼き上がる傍から受領されていく程多忙な毎日であった。

この黒パンの原料はライ麦の原麦をそのまま製粉したものの一〇〇%を使ったものが本来の黒パンであるとされ、文字通りチョコレート色で重量感があり、糠みそのような独特の臭気と酸味をもち、そしてずっしりと重たく、ざらついた感触と、すべてが白パンとは正反対の色、味、香りである。パン職人に聞いたところ、いろいろな穀物粉の配合割合によってそれぞれ異なった味と風味のあるパンができるとのことであった。

某日、シベリア抑留とともに満州から分捕った莫大な物品の中の包米粉（トウモロコシ粉）がパン工場に運ばれてきたことがあった。その粉で焼かれたパンはカステラのように美しい黄金色をしており、大いに食欲をそそられたが、モサモサとした味はカステラとは雲泥の差であり、ロシア人からも不評さくさくであった。彼らが最高の味というのはそば粉とライ麦粉とで作った黒パンであるという。黒々とした色、香ばしく

粘りのある歯ごたえと、確かに最高の味と言えよう。

巷間、手軽に焼けるパンの本とかホームメイドでパンづくり等と美しいグラビア印刷の本が書店に並んでいるが、黒パンの作り方を探してみるが、ほとんど見受けられない。時たま載っているのを読んで見ると、ドライイーストで醸酵させ黒砂糖等で着色するような作り方が書かれており落胆させられる。

パン職人は時々、どこかから茶色に乾燥した草のような物を鍋で煮出して、その汁を酵母母液に混ぜているのが見受けられる。ある日、その煮出した後の草をゴミ箱へ捨てに行ったので好奇心からそれを拾って調べてみたら、夏から秋にかけて森に薄赤く色づくスグリや野ブドウの実や葉の乾燥したものであることが分かった。酵母母液は使っているうちに醸酵力が落ちていくので、時々新しい野生酵母の着いている母液をつくり醸酵力を高めていくことを体得した。

先年、ウラジオストクへ戦友の慰霊墓参に旅行したときレストランでの食事に出てきた黒パンは、往時と異なり一kg程の小型になっており、何だか白っぽく

日本のソバのような色に焼かれ、あの独特の黒い色はなく物足りなかつた。

私の知る狭い範囲であるが、東京の神田精養軒という独創的なパン店で焼いている黒パンは本物の味である。東京に行けば必ず数本買って帰り、独特の風味を味わっている。パンの通は黒パンを好むと言われた恩師の川島四郎先生のお言葉をいつも思い出す。

第十九話 ビタミン補給

あの寒い満州よりも更に一段と寒いこのシベリア、基礎代謝量にも満たない日々の食物、その逆に激しい重労働の日々、在満当時に蓄えていたエネルギーもこの劣悪な環境ではすっかり枯れ果てて骨と皮の骸骨のような姿と化し、これが精銳を誇ったかつての関東軍の姿かと、あまりにも変わり果てた兵士の後ろ姿に情けなく涙が出た。人ごとのように述べているが、自身も同様であることは十分承知しての上である。

一日三五〇gの黒パンと塩汁のようなスープを与えられ、毎日暗い森の中へ重い足取りで伐採作業に向か

う。陽光も十分に届かぬ暗い森の中に、いつごろ倒れたのか巨大な樹木が不規則に横たわっている。腐葉が表面を覆い、場所によっては苔が青く彩っている。そのような中を指示された巨木の伐採に向かうのであるが、足が重くて跨ぐこともできなくなってくるのであった。更に症状が進むと地上の石ころや散らばっている樹木の小枝に足をとられ転倒する。足は腫れて重たく、指で軽く押さえるとペコンと凹み、いわゆる脚気症状を呈しているのである。

このようなケースの者が増加するとともに労災事故も増えてきた。ソ連当局は捕虜の健康よりもノルマ達成のために対策を立てざるを得なくなった。

しかし数十万人を対象とするだけに膨大なビタミンB₁製剤が必要となってくる。そこで誰が発案したのか、黒パンを作るときの原料であるドロジの利用を思いつき、ソ連衛生部当局の命令で各ラーゲリでの飲用が強制されるようになったのである。当初は糠みその汁のような味と匂いをもった白いドロドロの液体を湯飲みに一杯ずつ配られたが、悪評であった。

しかし栄養学的にはライ麦の浸出液なので、ビタミンB₁が含まれているので脚気対策として意味があった。ただしまずいのが欠点であったが、自らの健康を守るためとソ連当局の強制的な命令により、甘酒のように白く、そして糠みそ臭いドロリとした液体を毎朝、食事当番が炊事から受領してくる。一人当たりコップに半分程の量が配られる。とても酸っぱい味と匂い、これは一体なんだ、炊事ではドロジと呼んでいる。なる程ドロドロした汁だからドロ汁、それが簡略化されてドロジと呼んでいると誰もが理解していた。ところがロシア人もドロジと呼んでいるのである。

過日、ロシア語辞典を引いて調べたら酵母、イーストと訳されていた。これは黒パンを作る工程で使われるものである。ライ麦の全粒粉を原料とするからビタミンB₁はたっぷり含まれており、手近なビタミンB₁補給として合理的ではあった。

過日、福井県庁で開かれたロシア沿海州地方行政庁との意見交換会で同席した国立極東大学のクルラーボ

フ教授をつかまえてロシア一般市民は脚氣予防にドロ
ジを飲むのかと尋ねたら、誰も飲まないと言う。ド
ロジと砂糖を混ぜて温暖な場所に置くとドロブク風
の飲み物ができるので、低所得者の愛飲家がときたま
試みる程度であるとのことであった。

もう一つのビタミン対策としてビタミンCの補給で
ある。新鮮な野菜不足から来るビタミンC欠乏症であ
る壊血病が一部に出始めた。ピンク色の歯茎が紫が
かった色になったり皮膚の毛穴が変色してくるとか、
抵抗力が衰え風邪をひいて発熱する者が出始めた。こ
れは独ソ戦当時、多くのソ連兵士が壊血病で倒れた経
験から、寒冷地戦線におけるビタミンC確保対策とし
てスターリンはソ連の医学や栄養学の研究者を動員し
て酷寒地におけるビタミンCの確保を至上命令として
研究陣を叱咤した結果、幸運にもあの原生林に繁茂す
る「松」の葉に野菜に匹敵するビタミンCが含まれる
ことを発見し、独ソ戦の勝利の上に多大な貢献をした
という実績から、シベリアの原生林に無数に存在する
松葉汁をこれも収容所長命令で強制的に飲用させられ

た。

カテゴリー検査で三級に格付けされ軽作業に回され
た者が松葉汁製造作業に従事させられた。近くの森へ
タポール（斧）一挺を持って行き、直径一〇cm程の松
を伐りラーゲリに引きずって帰る。ドラム缶に四〇度
程度の温湯を沸かしておく。厚板の上で松葉を斧であ
らく刻む、刻んだ松葉を温湯の中に入れ、室内に一夜
放置して松葉をろ過してでき上がり。松葉独特の青臭
い匂いと酸味を帯びた松葉汁は、美味ではないがビタ
ミンCの欠乏しているときは体が求めるのか、抵抗な
く飲めた。

福井県国際交流員としてウラジオストクから派遣
されているうら若き美人のオリガ・ペンソワ嬢に松葉
汁について尋ねてみたら、そんな話は初めて聞いた、
当然のことながら飲んだことはないとの答えだった。

松葉に含有するビタミンC量、機会あるごとに文献
を調べているが、いまだに確認できない今日ではある
が、緑茶にビタミンCが豊富に含有していることから
十分に領けるものである。

第二十話 水原事件

昭和二十三年の初春、一四六kmの森林ラーゲリから一四二kmの第三ラーゲリへ移動した。このラーゲリはあの忌まわしい旧軍隊的なムードは消え去り、選挙によって選ばれた中央委員と称する役職の者によりラーゲリは運営されていて、文化活動も活発で明るい感じがするラーゲリであった。誰言うとなく「このラーゲリに巨人軍の水原がいる」という情報が伝わった。野球には興味がない私であるが、水原の浮名が世間で噂されていたので彼の名前は覚えていた。

いつの等級検査でもフタロイ（第二級）の格付けしかされて来なかったのにここでの検査では珍しくツリーチ（第三級）に格付けされ、それに伴いラーゲリ内の軽作業に就くことになった。昨日まで鉄道建設の重労働に駆り出されていたのが、今日からは広場の掃き掃除や被服倉庫の使役、炊事場でのジャガイモの皮剥き等々ノルマのない軽作業の日々を次の検査の日まで保証されるのであった。おかげで衰弱した体も目に見えて回復してきた。ある日、今日から入浴場の薪割

りに行くよう指示があった。

入浴場には噂の水原氏が責任者として勤務していた。昔の写真から見れば痩せてはいるが、我々から見れば羨ましい体格の持ち主であった。そして彼と二人挽きの鋸で運ばれてきた松を切り、斧で割って薪をつくり巨大なふる釜の焚き口へ運ぶ作業に十日間程従事したが、その間の彼の印象は、必要以外は冗談一つ言うでなく、黙々と仕事と取り組んでおり、笑顔は見たこともなかった。周囲に親しく口をきく者もいなかったようで、スポーツマンらしくない暗い陰性な人物との印象を受けた。

誰かが言っていた。水原の前で野球の話は絶対にするな、彼が野球の選手であったことをソ連側に知られたくないからだという。当時、野球は資本主義国アメリカのスポーツであるがゆえにソ連では受容されなかったのである。その選手をしていたことが政治将校に知られると、安定している入浴場の責任者のポストは奪われ、一転して一般重労働に回される可能性があるからだと語られていた。そういう目で見ると、水原

氏の日常の挙措動作は、何事も目立たぬように控えめに行動していたことがなるほどと思われた。

昭和二十四年七月、彼は第三三ラーゲリからタイシエット中継地を経てナホトカに到着、信濃丸で祖国に帰還した。懐かしの我が家は後回しにして、折しも開催中の後楽園球場へ舞鶴から直行、復員服の姿でマイクの前に立ち、復員第一声をスタンドの大観衆に向かって「水原、ただいまシベリアから帰って参りました」と感激の挨拶をした。そして、想像を絶する酷寒の中で一片の黒パンと水のようなスープを与えられた荷重なノルマに多くの戦友が異国の丘に散って行った、生き残った我々にはアクチーブを通じて帰国と引き換えに思想教育を強制され、心身ともに痛めつけられ気も狂わんばかりの日々であったと、抑留中のソ連の不当な処遇をなじる談話を発表した。

このニュースは直ちにソ連へ流された。『日本新聞』にも大きく取り上げられ、ソ連全土に所在する日本人ラーゲリのソ連式民主運動に大きな衝撃を与えた。特に水原氏のいたタイシエット地区はショックが大きい。

かった。

「ドブネズミ水原を許すな」「反動、水原を葬れ」等と用意されたプラカードが随所に立てられ、憤慨するアクチーブたちに扇動されてラーゲリ内は打倒水原の罵声と興奮のるつぼと化し、連日にわたり水原糾弾の集会が開かれた。

アクチーブたちは「この中にも水原はいる」「第二第三の水原をラーゲリから絶対に出すな」「同志諸君の周辺を絶えず警戒せよ」等と絶叫する。その声に興奮したのか、またアクチーブに迎合してか、タイムイングよく数人の者が飛び出して拳骨を振りながら水原の行動について激越な演説をするのであった。この事件以後、当然のことながら政治教育の度合いは一段と激しくなってきた。

一カ月程遅れて我々はタイシエットを後にナホトカの土を踏んだ。最終集結地ナホトカでも水原氏を糾弾する声がかまびすしく、ここでタイシエットからのグループは、水原の抑留地としてつとに知られている結果、集結地アクチーブグループからは一段と厳しく注

日されていたので引揚船に乗船するまでは薄氷を踏む
思いであった。

生年月日 大正十二(一九二三)年十二月十五日

軍歴

昭和十九年十月

大阪府堺市中部第三一部
隊(輜重第四連隊)

昭和十九年十一月

旧満州国東満総省林口街
満州第二八七部隊

昭和二十年三月

旧満州国東満満道街満州
第一八〇部隊

昭和二十年四月

旧満州国東満八面通街満
州第八八部隊

抑留歴

昭和二十年～二十一年

タイシエット二六km第五
病院

昭和二十一年～二十二年

タイシエット一七八km第
四二ラーゲリ新第五病院

昭和二十二年～二十三年

タイシエット一九八km第

昭和二十三年～二十四年

一ラーゲリ
タイシエット一三五km森
林ラーゲリ

〃 〃

タイシエット一四二km第
三三ラーゲリ

昭和二十四年

タイシエット二九二km第
一二ラーゲリ

職歴

昭和二十五年～五十五年

昭和五十五年～現在

福井県庁勤務
天谷調理師専門学校専任
講師